

貨幣の機能と信用

—岩井克人『貨幣論』批判—

鈴木 敏 紀
(平成8年4月30日受理)

要 旨

貨幣の諸機能については、マルクスが『資本論』において価値尺度、流通手段、蓄蔵手段、支払手段、世界貨幣という順でかなり詳細に分析している。マルクス経済学においては、この貨幣機能論が基本をなしている。しかしこの貨幣機能論の解釈は必ずしも一致して理解されているわけではない。例えば、世界貨幣は貨幣機能の範疇に入るものなのかどうか。また蓄蔵手段の機能から支払手段の機能への機能的発展はどのような論理内容で展開されなければならないのか。価値と価格との乖離の問題と貨幣の機能との矛盾はどのような論理で解決されるべきか。そもそも貨幣とは何か。

これらの諸問題に対して多くの研究がなされてきたのであるが、岩井克人の『貨幣論』はこれまでの研究の成果に非論理的で非科学的な見過ごすことのできない論理をもってマルクス貨幣論を批判している。岩井は価値形態論における貨幣の必然性についても貨幣機能論においても「宙吊りの無限の循環論法」なる論法でマルクスの貨幣の必然性と貨幣の機能論とを一刀両断しているのであるが、岩井が循環論的貨幣機能論を展開すればするだけ、その非論理性と非実証性が明らかになるのである。

本論文は、マルクス貨幣論が基本的に正しいことを追加的な概念装置を使って論証することを目的とする。貨幣機能の追加的な概念装置とは、価値実現手段としての貨幣、使用価値実現手段としての貨幣、価値擬制手段としての貨幣および「信用の二重性」である。とくに「信用の二重性」とは、「本来的信用」と「擬制的信用」という信用の二重構造を意味する。「本来的信用」とは、貸付信用、商業信用、及び銀行信用における信用を実体とするものであり、その形態は商業手形およびそれから発展した「兌換銀行券」を含む「信用貨幣」である。「擬制的信用」とは、国家の「法の支配」による「法的権威」を信用の実体とする「権威的信用」であり、その形態は「不換紙幣」であるところの「不換銀行券」と「政府紙幣」である。

岩井が強調する「薄汚れた紙切れ」であるこの「不換紙幣」が永続的に流通する「秘密」を解くカギは、「宙吊りの無限の循環論法」が錯綜する宇宙にあるのではなく、「信用の二重性」が錯綜する現実の場に隠されているのである。本論文はこれを明らかにする。

KEY WORDS

money	貨幣	fiction of value	価値擬制
realization of value	価値実現	credit money	信用貨幣
realization of value of use	使用価値実現	duality of credit	信用の二重性

1. 価値表現手段または計算貨幣

マルクスが『資本論』の価値形態論で明らかにしている貨幣生成の必然性について、岩井克人は彼の『貨幣論』で特異な「無限の循環論法」によって批判しているが¹⁾、その批判はマルクスの論理に対する内在的批判ではなく、貨幣は「無から有が生じた」という「奇跡」あるいは「神秘」²⁾によって生成したとする非科学的論理による批判である。

彼の貨幣形態の論理はマルクスの価値形態論に依拠しながらも、単純な価値形態、拡大された価値形態、一般的な価値形態、そして貨幣形態へと上向する弁証法的論理の連続線上にあるのではなく、「神秘」とか「奇跡」とかいう外的要因を導入してくるもので、それは「無」から強引に生成させた実体のない「すぐさびついてしまう安っぽい金属のかげら」または「いまにも破れそうな薄よれた紙切れ」³⁾を貨幣として引き出してきているのである。

したがって岩井の貨幣形態はすべての商品の価値を同時的に表現し、尺度する価値表現形態ではなく、商品の単なる交換を媒介する手段としての貨幣の流通形態でしかないのである。価値形態論と貨幣機能論との混同がそこに現れている。単純な価値形態、拡大された価値形態、一般的な価値形態、そして貨幣形態は共通して、相対的価値形態に立つ商品が等価値形態に立つ商品の価値によって自己の価値を表現する形態なのであり、それは貨幣生成の必然性を内包させた商品価値の表現形態なのである。岩井の貨幣形態は、交換手段としての貨幣機能を表現する形態であって、貨幣の必然性を内包した価値表現形態ではないのである。何故に岩井の貨幣形態は価値表現形態ではないのか。

岩井は価値形態を展開するのに一般的価値形態までは価値実体のある商品世界を想定して論理を展開しながら貨幣形態にいたって「無価値なモノ」を「無」の世界から持ちだして論理を断絶させているからである。そして彼はこの貨幣形態こそが拡大された価値形態を成立せしめているという「宙吊りの循環論法」によって「貨幣存在の無根拠性」を強調する。すなわち岩井は次のように言う。「貨幣という存在は、みずから存在の根拠をみずからつくりだしている存在である。それは、全体的な価値形態 B と一般的な価値形態 C とのあいだの無限の循環論法によって、宙吊りの的に支えられているにすぎない。商品語ではなく人間語をもちいれば、あるモノをすべてのひとが商品のかわりに貨幣として受け入れるのは、そのあるモノをいつか貨幣として手放してべつの商品を手に入れるためであり、そのあるモノをいつか貨幣として手放してべつの商品を手に入れられるのは、そのあるモノをすべてのひとがいつでもその商品のかわりに貨幣として受け入れてくれるはずだからである。貨幣が貨幣として流通しているのは、それが貨幣として流通しているからでしかない」と⁴⁾。これはまさに貨幣を単なる交換手段としてしか見ていない視点であり、価値表現または価値尺度という貨幣の根本がまったく欠如している視点である。

このような「宙吊りの循環論法」を岩井がなんべん繰り返したとしてもそのような非科学的な論法では、貨幣の必然性を論証したことにはならない。また同じことであるが、岩井が貨幣の存在は「神秘」であり、それ自体「奇跡」的な存在であるとする「貨幣の無根拠性」を論証するとしても、「宙吊りの循環論法」という非科学的論法では論証にはならないであろう。貨幣の「神秘性」または「無根拠性」を論証したいなら、マルクスの価値形態論に依拠するのではなく、商品交換と同時存在としての「薄汚れた紙切れ」が貨幣として流通した歴史的始原を明

らかにすべきであろう。

岩井の貨幣形態における貨幣が「宇宙」という「神秘」の世界から「奇跡」として導入された「薄汚れた紙切れ」であるがゆえに、その貨幣は諸商品の価値表現手段ではなく、単なる交換手段としての貨幣の流通形態でしかないのである。すなわちその貨幣形態は論理の連続性を断絶させた諸商品の交換形態、または商品流通形態なのである。岩井は言う。「貨幣が『ない』ことと『ある』こととの間には乗り越えられない断絶が横たわってる。そして、その断絶が現実において乗り越えられたとしたら、それは『歴史の偶然』、いや『歴史の事実性』としかいいようのない無根拠な出来事であり、まさにひとつの『奇跡』にほかならない。」と⁵⁾。岩井自身がマルクスの弁証法的論理の連続性をもって断絶させておいて、「その断絶が現実において乗り越えられたとしたら」などという言い種はないであろう。またその「断絶」が「乗り越えられた」という「歴史の事実性」とは、いつ、どのように現れた「事実」なのか？歴史の実証性を欠いた「奇跡」の「歴史の事実性」などはまったくあてにならないものである。もっとも歴史の実証も論証も不可能であるから、「奇跡」でごまかしているのであろうが、しかし自ら設けた「奇跡」の仮説を「歴史の事実性」というのもおこがましいことである。

岩井は、「歴史の事実性」を証明することなしに引き出した「奇跡」によって、商品世界に現れた「薄汚れた紙切れ」が「貨幣として流通しているのは、それが貨幣として流通しているからでしかない。」と言い切っているように、貨幣は、交換手段または流通手段として商品世界に現れたのであって、価値表現手段または価値尺度として現れてはいない。なぜなら岩井の貨幣は価値実体のない商品性のないモノでしかないからである。岩井は言う、「貨幣が貨幣であるのは、それがモノとして充実した価値をもつ商品であるからではなく、」「安っぽい金属のかげらや薄よごれた紙の切れはしや一瞬のうちに消えてしまう電磁気的なパルスといった、それ自体ではなんらの商品性ももっていないモノ」が「鑄貨として紙幣としてエレクトロニック・マネーとして流通することによって、モノとしての価値をはるかに越える貨幣として価値をもつことになるのである。」と⁶⁾。

したがって岩井の貨幣形態は交換手段ないし流通手段として「神秘」の世界から「奇跡」として商品世界に突如として現れ、流通を始めるのである。しかし貨幣形態は、貨幣が交換手段として流通する前にまず諸商品の価値を表現ないし尺度し、計算貨幣として機能していることを表している形態なのであるが、そのような貨幣の機能はどこへ行ったのか。価値形態とは貨幣形態も含めて価値表現の形態なのであって交換形態なのではない。岩井は、価値形態から貨幣形態への移行において、その移行こそが「乗り越えがたい断絶」であり、そしてついに「乗り越えられた断絶」として価値形態を切り捨ててしまう。しかし岩井の価値形態と貨幣形態との間に横たわっている「断絶」の「乗り越え」法は、「宙吊りの無限の循環論法」によって作り上げられた「神秘的宇宙」で起こった「奇跡」によるものである。そしてその「奇跡」にこそこの世の貨幣の「神秘」があると岩井は言う。すなわち「もし商品世界に『神秘』があるとしたら、それは商品世界が『ある』ということである。それは、もちろん、その商品世界を商品世界として成立させる貨幣が『ある』ということの『神秘』である。」⁷⁾と。この論法は、神がかり的説法のなにものでもないであろう。

岩井が、労働価値説にもとづくマルクスの価値形態論を宗教的説法で論破しようとすればするほど、マルクスの価値形態論の科学的正当性が強められるであろう。

2. 価値実現手段

岩井が宗教的説法をもって貨幣の「奇跡」と「神秘」を論じ、価値実体のない「薄汚れた紙切れ」を持ち出し、貨幣形態は価値形態の最終段階として価値表現形態であることを否定しているのであるが、みずから「原始貨幣」の歴史的な存在として、「金のほかに、銀、銅、青銅、鉄、鉛、黒曜石、石の円盤、ガラス玉、陶片、指輪、塩、矢、刀、斧、鉄砲、木材、樹皮、小麦、大麦、トウモロコシ、米、ココナッツ、アーモンド、ヤム芋、砂糖、茶、ラム酒、ジン、タバコ、笛、太鼓、毛布、麻布、綿布、絹布、羽毛、皮革、牛、羊、水牛、豚、トナカイ、干し魚、バター、子安貝、法螺貝、カタツムリ貝、鯨の歯、犬の歯、豚の歯、蜜蝋、そして人間の奴隷といったありとあらゆるものが、古今東西にわたって貨幣として流通していた」と述べているのであるが⁸⁾、そこには「薄汚れた紙切れ」が貨幣として流通していた事例はない。それらはまさに「商品性」の高いモノから「人間的価値」の象徴的存在が貨幣として流通しているように思える。「原始貨幣」なるモノは、生活手段や生産手段としてさまざまな生活様式と一体となった日常の生活になくしてはならない生活必需品であったり、政治的権威や権力を象徴するモノであったり、軍事的武器であったり、宗教的呪術性のあるモノであったり、そのほとんどすべてが使用価値として優れて有用性の高い、したがって「商品」としても「贈答品」としても交換度の高いモノか、あるいは「人間的価値」を表現したモノであることがわかる。この「原始貨幣」に見える雑多な貨幣商品は、価値形態で言うならば、多様な一般的等価形態を表しているものといえる。したがってこれらのモノが貨幣として流通していたということは、「貨幣が貨幣であることはそれがどのようなモノであるかということとは関係もないということ」を意味している⁹⁾のではなく、その時代、その場所という時間的場所的空間における特殊な社会形態における社会的価値体系の一環として位置付けられるまさしく「人間的価値」の最も優れた価値実現手段であったことを意味している。それらはさらに言えば、特殊歴史的場において「最も商品性の高いモノ」であったとも言えるのである。

したがって貨幣商品は、それ以外の諸商品すべての価値表現手段として機能すると同時に、貨幣商品以外の諸商品の価値実現手段として機能しなければならない。なぜならば、諸商品の価値表現は、一般的等価物である貨幣商品に対して直接的な交換可能性を示しているだけでなく、価値実体としても観念的な存在でしかなく、そこでは貨幣は観念的な計算貨幣としてしか機能していないからである。だから相対的価値形態に立つ諸商品の直接的交換可能性の現実性への転化、および観念的存在としての価値の現実的価値への転化は、貨幣商品への実際的な転化以外ありえないのである。

多種多様な貨幣商品は、商品世界が拡大するにつれ、それらのなかから時間的場所的空間を通底する諸社会共通の価値基準をもちうる貨幣商品に収斂するであろう。その貨幣商品とは耐久性、不変性、希少性、可搬性、用途性などに優れている貴金属商品、金または銀である。マルクスは言う、「金と銀はほんらい貨幣ではないが、貨幣はほんらい金と銀である」と¹⁰⁾。「貨幣はほんらい金と銀である」というのは、「原始貨幣」に見られる種々雑多な貨幣商品も商品世界の拡大につれて淘汰され、終局的に金または銀に収斂することを意味する。すなわちそのことを価値形態でいえば、多種多様な一般的価値形態が完成された貨幣形態へと移行するということである。

したがって諸商品が貨幣に転化する要因は、岩井特有の「宙吊りの循環論」による「貨幣が貨幣として流通しているからである。」ということではない。貨幣が転々と流通する以前に商品が貨幣に転化しなければならないという段階がある。この第1段階の転化要因を貨幣だけに求めては片手落ちである。この第1段階は、商品と貨幣とに内在する矛盾を要因として、商品は貨幣に転化するのである。すなわちその矛盾とは、商品価値の観念性と貨幣価値の現実性との矛盾である。商品の価値は、その商品をいくらなでまわしても、また分解してみても価値実体は把握できるものではなく、それは抽象的観念的存在でしかない。それに対して貨幣の価値は例えば「1オンスの金」というように、その自然形態の数量によって表章された具体的で現実的存在であるからである。だから貨幣はその機能を商品価値の観念的な価値の表現手段、すなわち観念的な計算貨幣から具体的で現実的な価値への実現手段として発展させなければならない。「実際に一つの交換価値の作用をなし得るために、商品はその自然的な肉体をぬぎ去らなければならない。すなわち、観念的な金であるにすぎないものから、現実の金に転化されなければならない。」¹¹⁾のである。

岩井は、この商品の貨幣への転化という第1段階を「売る」という「人間語」に翻訳して次のように述べている。「一般的な価値形態Cとは、手にもった商品を貨幣と交換しようとおもっている売り手全体の立場をあらわしており、全体的な価値形態Bとは、手にもった貨幣を商品と交換しようとおもっている買い手全体の立場をあらわしている。それゆえ、商品を売るとは、一般的な価値形態Cの立場から全体的な価値形態Bの立場へと現実には跳躍すること」¹²⁾であると済ませているが、ここで肝心の「一般C」から「全体B」への「現実には跳躍する」という「売り」の必然的要因については説明がない。なぜ、商品は売られねばならないのか。「一般C」も「全体B」もその形態は本来価値の表現形態であるのであるが、よしんばそれらを交換形態と見立てたとしても、「現実には跳躍する」で済まらずに、交換の必然性を説明しなければならないであろう。もっとも岩井はすでに次のように特有の「循環論法」で説明している。すなわち、「貨幣という存在は、全体的な価値形態Bと一般的な価値形態Cとのあいだの無限の循環論法によって、宙吊りに支えられているにすぎない。商品語ではなく人間語をもちいれば、あるモノをすべてのひとが商品のかわりに貨幣とし受け入れるのは、そのあるモノをいつか貨幣として手放してさらにべつの商品を手に入れるためであり、そのあるモノをいつか貨幣として手放してべつの商品を手に入れられるのはそのあるモノをすべてのひとがいつでもその商品のかわりに貨幣として受け入れてくれるはずだからである。」と。

この説明は、「商品語」を聞くことも語ることもなく、「商品語」の何を「人間語」に「翻訳」したのかの説明もないままに、「循環論法」を展開し、商品の「売り」と「買い」を「貨幣」の「宙吊りの循環論法」で説明しているに過ぎないのである。

岩井は、価値と使用価値という基本的な「商品語」が理解できていないから、安易に「人間語」をもちいて説明せざるをえず、それも説明にならない説明でごまかしている。

商品の貨幣への転化という「売り」は、「商品価値の抽象的観念的存在から貨幣価値の具体的現実的価値への転化」という商品語をもって流通の第1段階は説明されなければならない。

しかしマルクスも言うように商品の貨幣への転化は容易なものではないのである。ある商品が貨幣商品への転化に失敗すれば、その商品は商品ではなく、単なるモノであり、商品価値の抽象的実体性は破壊される。だからマルクスは商品の貨幣への転化は「生命がけの飛躍 (sarto mortale)」¹³⁾であると言っている。商品にとってその実体的価値の破壊は商品の死を意味し、

その所有者にとってみれば、それを生み出した人間労働の破壊である。すなわち彼は、社会的に無用な労働に時間をかけ、汗したということであり、場合によっては自己の生命の続続すら危うくする事態でもあるのである。だからマルクスは言う、「この商品に対して支出された労働は、かくて社会的に有用なる形態で支出されていなければならない。あるいは社会的分業の一環たることを立証しなければならない。」¹⁴⁾と。

しからは、その商品の貨幣への転化の失敗の可能性とは何に起因するのであろうか。それを貨幣の次なる機能においてみてみよう。

3. 使用価値実現手段または購買手段

商品は貨幣に転化されなければならない。その転化は商品と貨幣に内在する要因によるものである。商品価値は観念的存在であり、貨幣のそれは現実的存在である。しかしこの二つの要因だけで、商品は貨幣に簡単には転化しえない。貨幣の側からも商品に転化しなければならない要因がなければならないであろう。それは岩井が繰り返して言うところの「貨幣が貨幣として流通しているから」という循環論的要因ではなく、貨幣商品の使用価値の性格によるのである。すなわち、貨幣は商品であるから価値と使用価値の二要因を内包しているのであるが、一般的等価物としてその価値は現実的存在ではあるが、使用価値としては観念的存在である。すなわち、貨幣の使用価値は、あらゆる諸商品の具体的で現実的な使用価値の一般的総括的存在として位置しており、あらゆる具体的現実的使用価値の象徴として存在している。その意味において貨幣の使用価値は抽象的観念的存在であるといえる。したがって貨幣はその抽象的観念的使用価値を具体的現実的使用価値に転化する必然的要因を内包しており、それは対極にある具体的現実的使用価値である商品に転化しなければならない。「お金さえあれば飢えも渴きもいやされる」が、「お金それ自体で飢えも渴きもいやされない」のである。

岩井は、「商品を買うとは、全体的な価値形態 B の立場から一般的な価値形態 C の立場へと現実に跳躍することである。」¹⁵⁾と述べているが、先に指摘したように「買い」の「現実の跳躍」を「貨幣存在の宙吊りの循環論法」では説明にはならない。まずきちんと「商品語」を使ってその必然性を説明しなければならない。

それゆえに、商品の価値実現は貨幣の使用価値実現を待って初めて可能ということである。商品の価値実現の対象は貨幣という唯一の存在に対してのみであり、その他のモノに対する選択の余地はない。それに対して貨幣の使用価値実現の対象はあらゆる諸商品に対する無数の選択枝において可能である。この商品と貨幣との両者の立場の違いが、商品にのみ「生命がけの飛躍」を強いることとなるのである。貨幣にはそのような「生命がけの飛躍」はない。

ところが岩井によれば、貨幣は商品よりも「はるかに根源的な跳躍を前提」としているという¹⁶⁾。すなわち貨幣とは、「無限の未来にむけて命がけの跳躍を強い」られるモノであるという¹⁷⁾。その理由は、「貨幣を貨幣として今ここにひきうけてもらうためには、貨幣を貨幣としてひきうけてくれる人間が無限の未来まで存在しつづけていることが期待されていなければならない。無限の未来にむけての期待のみが、今ここでの貨幣の貨幣としての価値を支えている。」¹⁸⁾からであるという。すなわち「貨幣価値の存在」理由は「無限の未来への期待」ということである。「無限の未来の人間」が引き受けてくれるであろうこの「無限の未来にむけて期待」を一

身に背負わされた貨幣とはどのような貨幣であるかという、岩井の念頭にあるモノは実は「民間の金融機関のオンライン化された口座のなかに電磁的に記録されているさまざまな形態の預金残高」¹⁹⁾であり、現在流通している不換銀行券、国家紙幣、各種の卑金属の補助貨幣なのである。そしてこれらの貨幣は、「無限の未来にむけて期待」を背負わされているという。その根拠は、「共同的な規制や中央集権的な強制」という「客観性」にあるのではなく²⁰⁾、その「期待」が「未来永劫にわたって客観性が確立されないという意味において、主観的であることを運命づけられている」²¹⁾ということにあるという。岩井は、この「期待」は「主観性」を「運命づけられている」というのであるが、「運命論」をもって貨幣の「命がけの跳躍」を説明しても、これも「循環論」と同様に非科学的で、ひとを納得させる論理ではない。それにもかかわらず、岩井は、これらの貨幣の存立根拠はまさにあの「宙吊りの循環論法」という「因果の連鎖の無限の円環」²²⁾にはかならないと強弁するのである。

ところが岩井はこの「因果の連鎖の無限の円環」も「危うい円環」²³⁾であるという。なぜならば、「貨幣の購買価値がインフレーションの加速化によって急激に低下していつてしまうという」²⁴⁾可能性があるからだという。そしてその場合、もはや貨幣に対する限りない「流動性選好の縮小」²⁵⁾が起り、貨幣に対する「無限の未来にむけての期待」を失わせる。その実例が第一次世界大戦後のドイツ、オーストリア、ハンガリー、ポーランド、社会主義革命直後のロシア、第二次世界大戦後のギリシア、ハンガリー、共産党政権確立前の中国、1980年代の中南米、社会主義体制崩壊後の東ヨーロッパ諸国と旧ソヴィエト連邦諸国、古くは独立戦争後のアメリカ、フランス革命下のフランスなどにみられるハイパー・インフレーションであるという²⁶⁾。

以上のことからわかるように、岩井の貨幣とは「薄汚れた紙切れ」として象徴されてきたように、国家紙幣ないし不換銀行券という国家権力を背景として強制通用力を保持した貨幣なのである。したがって国家権力の崩壊ないしは内乱による危機に際しては、誰もこれらの貨幣に「無限の未来にむけての期待」など持ちようがなく、まさに「薄汚れた紙切れ」それ自体でしかなく、貨幣としての機能は喪失するであろう。すなわち無価値な「薄汚れた紙切れ」が貨幣として「無限の未来に向けての期待」を保持しうるのは、その「期待」が「主観的であることを運命づけられている」からではなく、まさに「法の支配」という「客観性」をもった国家の強制通用力に支配されている性格のものであるからである。したがってその「期待」は、人々の国家の法的権威や権力に対する共通した「権威的信頼」または「権威的信用」というものである。

国家紙幣流通の「無限性」は、貨幣所有者が「未来における人間」に対して「貨幣をそのまま貨幣としてひきうけてくれる」²⁷⁾であろうという「主観的期待」にあるのではなく、国家権力に対する貨幣所有者に共通する「権威的信頼」または「権威的信用」に起因するものなのである。もとより国家紙幣が無限に流通したためしはなく、歴史の教訓を忠実に学ぶならば、それは国家の存亡とともに盛衰を繰り返してきていることがわかる。

しかし貨幣商品（金）に対する限りのない「流動性選好の縮小」は歴史上存在したことはないのではないか。その反対に、貨幣商品（金）への限りのない「流動性選好の増大」は、1971年8月15日のアメリカ大統領ニクソンの「金・ドル交換停止」宣言によってその極に達した。以後、ドルの急激で大幅な下落が開始した。

岩井が商品だけでなく、貨幣にも「命がけの跳躍」があるというとき、その貨幣とは国家紙幣であり、「命がけの跳躍」とは、その国家存亡の危機に直面したハイパー・インフレーション

をさしているのであるが、貨幣商品（金）の「命がけの跳躍」については、「貨幣は金であると唱えてきた金本位主義者やマルクス主義者がほぼ死にたえてしまった今、——この『跳躍』の根拠を見いだすことはできない。」²⁸⁾といっているが、金商品が貨幣となった事実が歴史上存在しているのであるから、この貨幣商品の「命がけの跳躍」の「根拠」を岩井自ら論証しなければならないであろう。「薄汚れた紙切れ」の「命がけの跳躍」を説明してみたところで、そこにはなんらの新鮮味もない。

この「薄汚れた紙切れ」である国家紙幣などが流通する根拠は、「法の支配」機関である国家の権力による経済過程への介入という経済外的強制力の発動と法的権威に対する人々の「権威的信頼」にある。それゆえに国家紙幣の流通量は権力的恣意性にかなり強く依存するものであるから、人々は「進行中のインフレーションがたんに一時的ではなく、将来ますます加速化していくにちがいない」²⁹⁾と認識することも「予想」することも可能なのである。しかしその「予想」は、現在の人々が、「未来の人々」に対して「主観的期待」を欠いたために立てたものではなく、国家権力に対する共通の「権威的信頼」を動揺させ、不信任を抱いたか、または国家そのものの存亡の危機に直面したかの客観的な「根拠」に基づいて立てるものである。このような紙幣が安定的に流通するためには、貨幣の流通法則に基づいた通貨政策が行われなければならない。

紙幣の貨幣としての流通機能については、貨幣の流通手段としての機能を理解しなければならないのである。岩井はこの理解がまったくない。

4. 価値擬制手段—価格と価値との乖離における貨幣機能的根拠—

マルクスは、「価値尺度」のところで「価格と価値との不一致」について次のように述べている。「価値の大きさが価格に転化するとともに、この必然的な関係は、一商品のその外部にある貨幣商品との交換比率として現れる。しかし、この比率では、商品の価値の大きさも、商品が与えられた事情のもとで手ばなされる大小も、表現せられうる。価格と価値の大きさとの量的な不一致の可能性、あるいは価値の大きさからの価格の乖離の可能性は、かくて価格形態自身の中にある。」³⁰⁾と。すなわちこの「量的な不一致の可能性」は、需給の不一致に基づくものであって、「この生産様式では、規律はもっぱら無規律性の盲目的に作用する平均法則として貫かれるのである。」³¹⁾とただけで、これ以上踏み込んで「価格形態自身」に内在する要因について詳細な分析を行っていない。さらに価格と価値との矛盾はこの量的矛盾にとどまらず、「質的矛盾」をも持ち合わせているという。それは、「それ自体としてなんら商品でない物、例えば良心、名誉等々も、その所有者は貨幣に対して売ることができるし、かくてまた、これらのものがその価格によって商品形態を得ることができる。したがって、ある物が価値をもたないでも、形式的に一つの価格をもつことができる。価格表現はここでは、ちょうど数学におけるある量のように想像的なものとなる。」³²⁾と。

マルクスのこうした「量的矛盾」と「質的矛盾」の要因についての説明は、そうした事実を例に上げたただけであって、貨幣の機能に基づいた説明にはなっていない。また岩井は「人間語」を使って、「商品の値札に書き込まれた価格は、市場の需給にかんする売り手の期待にもとづいた主観的な評価でしかない。主観はあくまでも主観である。それが買い手の需要を売り手

の供給とちょうど等しくさせる価格であるという客観的な保証はどこにも存在していない。」だから「買い手が財布から貨幣をだしてじっさいに商品を買ってくれることによって、はじめて売り手の主観的な評価としての商品の価格が客観的な判定をうけることになるのである。」³³⁾と語ってみたところで、これも価格形態に内在する要因として説明したことにはならない。それは貨幣所有者の欲求の主観性を述べているに過ぎないからである。それはまたマルクスと同じ需給論でしかないのであるが、マルクスの場合、その変動は価格の価値への収斂という価値法則と矛盾するものではないことを言おうとしているのに対して、岩井の場合は、買い手の購入価格が「客観的価格」であると済ませている。岩井は、需給を一致させる「客観的な保証はどこにも存在しない」と言いながら、買い手の主観的な欲求に基づく購入価格が「客観的価格」であるとしているのであるが、そうであるならこの「価格」と売り手の「主観的価値」との乖離の要因は一体どこにあるのか。岩井の場合、結局買い手と売り手との「主観性」のぶつかり合いということなのであろうが、それでは価格形態において貨幣と商品に内在する要因から説明したことにはならない。

貨幣の商品への転化の必然的要因は、貨幣のひとつの因子が一般的使用価値という抽象的で観念的な使用価値であることにある。貨幣のもうひとつの因子は具体的現実的価値である。それはある商品、例えば鉄という商品は、「その実在的な姿のほかに、価格という観念的な価値の姿または観念化された金の姿をもつことができる。しかし、商品は同時に現実的に鉄であって、また現実的に金であるということとはできない。」³⁴⁾と同様に、貨幣商品「金」も現実的に「鉄」であることができないのである。したがって、貨幣の観念的使用価値は商品の現実的使用価値に転化されなければならないのである。この貨幣の観念性の商品の現実性への転化は同時に、貨幣の現実性の商品の観念性への転化でもある。この現実的価値の観念的価値への転化にこそ、価格と価値との量と質の「乖離」の必然性が存在しているのである。貨幣という現実的価値が商品という観念的価値に対して、まさにその商品に現実的価値を与えるという機能にこそ「乖離」の必然性が潜んでいるのである。観念と現実との量の一致は、マルクスが先に述べた「盲目的に作用する平均法則」という不断の不均衡の均等化による「平均法則」として貫徹するものであろうが、質的不一致はこの「平均法則」の外にあるものである。

価格と価値との量的・質的矛盾の根本要因は、「商品語」をもっていえば、貨幣の現実的価値と商品の観念的価値との矛盾、および貨幣の観念的使用価値と商品の現実的使用価値との矛盾にある。それを根本要因として貨幣は商品に対して価値擬制の可能性が生じてくる。

このことを「人間語」に翻訳して、価格>価値の場合についていえば、貨幣所有者がある商品に対する欲求が高く、しかも十分な貨幣をもち、購買力が高い条件があるのに対して、商品所有者の所有する商品は十分な在庫がなく、しかも供給力が不足している場合、需要過剰（供給不足）が生じ、その商品は価値以上の価格で売買されるであろう。貨幣所有者はその商品に高い価格をつけて購入するのであるが、その価格はいわば使用価値価格であり、価値以上の価格をもつこととなる。極端な場合、無価値なものにさえ高い使用価値価格がつくのである。貨幣はその観念的使用価値を商品の具体的使用価値に転化させることによって、同時に商品の観念的価値を現実的価値に転化させ、無価値な商品においてさえ「無価値の価値の実現化」という「ない」ものを「ある」と評価する価値の擬制を行うのである。まさに貨幣は観念的使用価値であると同時に現実的価値であることによって価値擬制機能を有するのである。この貨幣の価値擬制機能が「価格と価値との矛盾」の価格形態に内在する貨幣的要因である。

ところで使用価値価格は貨幣所有者の商品に対する主観的な欲求の価格であるから、その価格は無限大のようにも思えるが、貨幣所有者の購買力を上限とするものであり、その意味で需要には限界がある。したがって使用価値価格の価値からの乖離の大きさは購買力の大きさの範囲内であるといえる。

価格<価値の場合は反対に、貨幣所有者の欲求が少なく、したがって購入の意欲が少ないのに対して、商品所有者は所有する商品の在庫を大量に抱え、さらに供給力も十分にあるという需要不足（供給過剰）という事態において生じるものである。これは使用価値価格が価値以下に評価されるということである。その下限はゼロであろうが、その場合、その商品の価値は完全に破壊されたという。だから需要不足の商品は適正な価格、すなわち価値価格にまで回復しない限り、供給は制限されるか、停止されるであろう。需要不足の場合、商品の観念的価値は貨幣の現実的価値によって現実化されず、「有価値の無価値への破壊」、または「高価値の低価値への現実化」という「ある」ものを「ない」と評価する価値の擬制が行われる。

商品の価格は、以上のことから使用価値価格と価値価格との統一であり、使用価値価格は貨幣所有者の側からの購入価格をさし、価値価格は商品所有者の側からの販売適正価格をさす。購入価格と販売適正価格との不断の不均等は、不断の均等化という「平均法則」にしたがって価値価格に収斂する。これをマルクスは「価値法則」という。

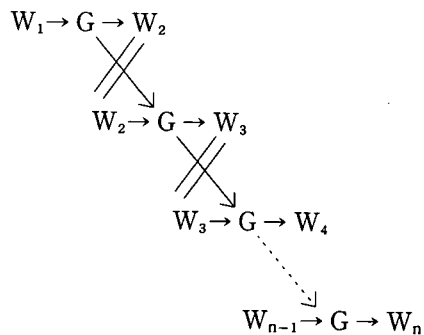
「価格と価値との乖離」とは、換言すれば「使用価値価格と価値価格との乖離」といえるのである。

5. 流通手段としての貨幣と流通法則

貨幣は商品の価値実現手段であり、また同時に使用価値実現手段でもある。この二つの貨幣の機能を同時に表現すれば、

$$W_1 \rightarrow G \rightarrow W_2$$

となる。この貨幣における最も単純な商品流通形態、すなわち商品の売買形態は無限の連鎖をもっている。すなわち $G \rightarrow W_2$ という購入は、その逆の $W_2 \rightarrow G$ という販売を同時に含んでいるものであるから、 $W_2 \rightarrow G \rightarrow W_3$ と流通は拡大する。この無限の連鎖は以下のように表記することができる。



この貨幣は転々と流通する。貨幣の価値実現手段と使用価値実現手段はこの商品流通界においては流通手段として統一される。

この無限の連鎖は、岩井が言うような「貨幣が貨幣として流通しているのは、それが貨幣として流通しているからでしかない。」という「宙吊りの無限の循環論法」ではなく、貨幣と商品とにおける価値と使用価値との外化された二要因による矛盾の連鎖からである。

ひとたび貨幣が流通手段として機能しはじめると、一定の期間内におけるその流通量は以下のように流通法則によって規定される。

$$\text{流通手段としての貨幣量 (M)} = \frac{\text{商品単価 (P)} \times \text{流通量 (T)}}{\text{貨幣の流通速度 (V)}}$$

すなわち流通手段としての貨幣量は商品流通総額に比例し、貨幣の流通速度に反比例する。流通速度は同一貨幣がある一定の期間内に回転する速度のことであるから、その速度が大きくなれば、貨幣量は少なくて済む。さきの貨幣の単純な商品流通形態における無限の連鎖において、商品は W_1 から W_n までであるのであるが、貨幣は G のみで済んでいる。これを式にあてはめてみると、

$$P=W, T=n, V=n \text{ であるから,}$$

$$P \times T = W \times n$$

$$M = \frac{W \times n}{n} \text{ 故に, } M=W, W=G \text{ であるから, } M=G \text{ となる。}$$

このように、貨幣の流通量が法則的に規定されていることによってわかることは、貨幣の流通速度 (V) と商品流通量 (T) が不変の場合、もし貨幣の流通量 (M) がなんらかの人為的要因によって増加したとすると、 P という商品単価が上昇し、物価高騰というインフレーションを引き起こすということである。また反対に貨幣流通量を減少させた場合、流通速度 (V) と商品流通量 (T) が同様に不変であるとして、商品単価 (P) は下落してしまい、物価下落のデフレ現象を引き起こす。もしこの場合、需要が旺盛で購買力が上昇傾向にあれば、流通速度が増加し、物価の下落は抑制される可能性がある。

また貨幣の流通速度 (V) と商品単価 (P) が不変であるときに、商品の生産が増大し、商品流通量 (T) が増大した場合、貨幣の流通量 (M) は、 $[M \cdot V = P \cdot T]$ であるから、それに比例して増加する。しかし M を人為的に抑制すると、 P は下落せざるをえず、物価水準は低くなる。貨幣の供給不足によって生じるデフレ現象は、貨幣供給の調節によって修正が可能となるが、需要不足 (供給過剰) によって生じたデフレ現象は貨幣供給の調節 (増加) で需要不足 (供給過剰) を解消することはできない。この場合、それは販売不振の状況下でのインフレを引き起こし、いわゆるスタグフレーション (stagflation) (不況下の物価上昇) となる。

貨幣の流通量に対する人為的操作はインフレ要因またはデフレ要因となるものであるが、貨幣の流通量 (M) は基本的に P (商品単価) と T (商品流通量) と V (貨幣の流通速度) の従属変数であるため、このようなインフレ的現象もデフレ的現象も貨幣の流通法則によって正常値に収斂するように修正される。なぜならば、貨幣の流通法則の基底に不断の不均等の不断の均等化という「平均法則」としての価値法則が貫徹しているからである。したがって貨幣の流

通貨に対する人為的操作による極端なデフレーションもインフレーションも結局は貨幣の流通法則に基づいた現象なのである。

W-G-W'という商品流通において転々流通する貨幣の機能は商品交換の単なる媒介手段であるようにみえる。この媒介手段としての機能を純粹化すれば、貨幣はそれ自体に実体性をもつ必要がない。すなわちその貨幣に価値実体を表章する刻印を押し、記号化して、貨幣それ自体に価値擬制化すればよいのである。マルクスはこの貨幣それ自体への価値擬制化について次のように述べている。

「通用しているうちに金貨は摩滅する。あるものは多く、あるものは少なく。金名称と金実体、名目含有量と実質含有量は、その分離過程を開始する。同一名目の金貨は不等の価値のものとなる。というのは異なった重量のものとなるからである。金は流通手段としては、価格の尺度標準としての金から偏差をもつようになる。そしてこのために、その価格を実現する商品の現実の等価ではなくなる。18世紀にいたる中世や近世の鑄貨史は、この混乱の歴史である。本来金である鑄貨を金の仮象に、また鑄貨をその公称金含有量の象徴に転化しようとする流通過程の自然的傾向は、金属磨損の程度に関する最も近代的な法律によって承認さえされている。この程度のいかんによって、金片が流通不能なものにされたり、貨幣の性質を剥奪されたりする。」³⁵⁾と。

すなわち貨幣はそれ自体の価値から乖離した価値名目を刻印されうる。換言すれば貨幣それ自体が価値擬制されるということによって、その貨幣は転々と流通しうることである。このことは特に国家の手によって作為的に、すなわち「法律」によって行われているということである。しかし国家が貨幣改鑄によって貨幣流通量を増加させ、過剰発行という政策を断行すると、貨幣の流通法則の支配を受けることとなり、場合によっては貨幣が「流通不能」に陥ったり、「貨幣の性質が剥奪されたりする」「混乱」を引き起こすこととなる。それが「18世紀にいたる中世や近世の鑄貨史」であったという。

このことは、また金鑄貨に限らず、あらゆる金属鑄貨にもあてはまることであり、卑金属鑄貨である補助貨幣や「薄汚れた紙切れ」である国家紙幣にもあてはまることである。これらの貨幣における「名目」価値とは擬制化された価値であり、それ自体には価値実体はない。その実体のない貨幣が流通手段として機能する。マルクスはいう。「相対的に価値のない物、紙券が金の代わりに鑄貨として機能し得るのである。金属的な貨幣徴標では、純粹に象徴的な性格がなお多少とも、かくされている。紙幣では、それはあらわに出てくる。」と。この無実体の貨幣が流通する根拠は、その貨幣を価値の「象徴」としての性格を与え、したがって価値擬制化し、それに強制通用力を与え、通貨発行権を独占した国家の権威と権力に存する。マルクスはいう。「ただ貨幣の表章は、それ自身の客観的に社会的なる通用性を必要とする。そしてこれを、紙券象徴は強制通用力によって得るのである。この国家強制が行われるのは、一共同体の境界線の示す通用部面、すなわち内国的の流通部面だけのことであって、また貨幣が流通手段としてまたは鑄貨としてその機能に全く解消できるのも、この限られた流通部面だけのことである。」³⁶⁾と。したがって国家権力の及ばない流通部面においては、そのような無実体な「薄汚れた紙切れ」は流通しないというのである。実際、われわれの日本国内での日常的な買物で、ドル、ポンド、マルク、フラン、リラ、ギルダー、ルーブル、ウォン、元などの外国紙幣は通用しない。それは外国においても日本円が通用しないのと同様である。もっとも有力な外国紙幣は国内紙幣と交換されうるということは周知のことであるが、外国紙幣が国内にそのまま流通

することはない。

岩井は、「薄汚れた貨幣」が流通するのは、それが「無限の循環論法によって支えられている」「奇跡」ないし「神秘性」にあるからだ次のような循環論法で説明しようとする。

「一ポンドの兌換紙幣を一ポンドの価値をもつ商品と交換にうけとってくれるのは、それをいつかどこかでだれかべつのひとに一ポンドの価値をもつ商品と交換にうけとってもらおうと思っているからなのである。それはたんにひとりのひとの手からべつのひとの手へと先送りされるだけであり、時間と労力の支出をとまなう金貨との兌換の権利はじっさいには行使されることはない。そして、じつは、その一ポンド紙幣をいつかどこかでだれかべつのひとが一ポンドの価値をもつ商品と交換にうけとってくれるのは、そのひともそれをいつかどこかでさらにべつのだれかに一ポンドの価値をもつ商品と交換にうけとってもらおうと思っているからなのである。それはたんにべつのひとの手からさらにべつのひとの手へと先送りされるだけであり、時間労力の支出をとまなう金貨との兌換の権利はここでも行使されることはない。そして、じつは、……。ここにふたたび、あの貨幣形態Zの無限の『循環論法』が作動しはじめている。」³⁷⁾。この「『奇跡』は日々くりかえされなければならないのである。」³⁸⁾と。

岩井は、貨幣所有者が抱く「無限の未来の未知の人間」へのこうした「期待」は「たんなる主観的」なものにしか過ぎなく、なんらの「根拠」もないという³⁹⁾。しかし岩井が、「『最後の審判』のラッパの音とともに」未来が消滅するとすれば、「一万円札を一万円札の価値としてそっくりそのままひきうけてくれる人間がすべて地上から消えさってしま」い、「一万円の紙切れである一万円札はたんなる一枚の紙切れになってしまうはずである。」⁴⁰⁾と言うのであるが、その「ラッパ」の音については、「いつの日かに最後の審判のラッパが鳴り響くことが予想され」⁴¹⁾るはずのものであるから、「ラッパ」の音が鳴り響く状況がどのようなものなのか人々には十分認識可能であろう。だからその状況が人々に認識されると「だれも貨幣を貨幣としてもとうとはしなくなるのである。」⁴²⁾のは当然ではないのか。それはまさに人々の経済行為の「客観的」な判断状況であろう。そしてその「ラッパ」の音とは、まさに戦争、内乱、動乱、革命等の進軍「ラッパ」の音ではないのか。岩井がいみじくもその事例として先に上げたハイパー・インフレーションの歴史はそれらを背景にもっているものである。国家の崩壊ないしはその危機は、国家の権威と権力を失墜させ、「法の支配」を喪失した国家の紙幣やその他の補助貨幣はもはや強制通用力を失い、流通貨幣としての機能を喪失し、その貨幣はマルクスが言うように「貨幣の性質を剥奪されたりする」のである。

岩井は、自ら否定した貨幣流通の「客観的根拠」を歴史的事例として上げているという矛盾に気が付かず、性懲りもなく「薄汚れた紙切れ」は「無限のかなたの未来に住む人間から今ここに住む人間へと送られてきた、気前のよい贈りものにほかならない。」⁴³⁾という。岩井がこのような言いぐさで貨幣流通の「無根拠」という根拠を論証したつもりでいるとしたら、経済理論はまさに「神話物語」となるであろう。

われわれはもはやここに留まる必要はない。さらに貨幣の商品流通形態における諸問題を貨幣の諸機能から分析を進めていかなければならないのである。

6. 蓄蔵手段としての貨幣とその資本への転化

貨幣の商品流通形態 $W-G-W'$ においては、「売り」は同時に「買い」であり、「買い」は同時に「売り」を表し、無限の連鎖につながれているように見える。しかし、 $W-G$ と $G-W'$ とにおいては時間的分離の可能性を含んでいる。貨幣 G が遊休貨幣として流通界から脱落するのである。

遊休貨幣発生の原因は、一般的抽象的使用価値としての貨幣が具体的価値としての商品へと転化する必然的要件が備わっていないことにある。すなわちその原因の第1は、時間的場所的空間において転化の対象となるべき具体的商品が存在していないか、必要とされていないかとのいずれかにあるということである。換言すれば、貨幣所有者の欲求すべき商品が眼前にないか、またはあっても今現在緊急を要しないということである。そのとき貨幣は遊休貨幣として将来への出動に備え、蓄蔵されるであろう。貨幣の流通手段としての機能は蓄蔵手段としての機能に転化する。

第2は、貨幣の現実的価値と商品の観念的価値とが矛盾し、観念的価値が現実的価値を上回っている場合、換言すれば、貨幣所有者の購買力が不足し、欲求している目当ての商品の販売価格が高過ぎて買えない場合、彼の貨幣は遊休貨幣となり、購買力が増大するまで蓄蔵されるであろう。これは具体的には商品市場が売り手にとって有利な状況、すなわち需要過剰（供給不足）となっている「売り手市場」の場合である。高い購買力を有する少数の貨幣所有者だけが欲求を充足することができ、多くの低い購買力しかもたない貨幣所有者は販売価格が下落するまで待機するか、高い購買力がつくまで貨幣を蓄蔵するのであろう。

第3は、販売価格が下落するという「買い手市場」の場合である。価格の下落は貨幣所有者の購買力を相対的に増大させ、その一部の貨幣は遊休化し、蓄蔵される。商品市場は価格の不断の変動を常とするものであるから、商品売買から生じる貨幣の遊休化は必然であり、したがって現在の価格下落による貨幣の遊休化は、将来の価格上昇に備えての価格変動準備金として蓄蔵される。

第2と第3の原因に見るような商品流通における不断の価格変動は、「貨幣の流通量も休みなく、満潮となったり、退潮となったりする。」のであり、「退蔵貨幣貯水池は、同時に流通貨幣の流出入の水路として役立つ。だから、このような貨幣がその流通水路から溢れでるようなことは決してない」⁴⁴⁾とマルクスもいうように、必然的に生じる遊休貨幣は流通貨幣としての準備金として蓄蔵されるということである。

しかし蓄蔵貨幣は流通貨幣のたんなる準備金ではない。貨幣はこのように一方で価値の量的制限性に拘束されているのであるが、他方であらゆる商品の具体的使用価値に対する一般的使用価値として質的な無限性を備えている。貨幣は自らこの矛盾を解決しなければならない。

さらに、貨幣は本来現実的価値でありながら、流通貨幣としてはかならずしも価値実体を必要とせず、ただ名目だけを必要とする商品交換の媒介手段でしかないということである。貨幣が流通界に留まっている限り、この実体と形態との矛盾は解決できない。貨幣が量的具体性をもった現実的価値であり、したがって価値の自立体であるという本来の実体を形態的に表現するためには、その貨幣はまず流通界から脱落し、現実的価値として蓄積されなければならないであろう。これが遊休貨幣発生第4の原因である。すなわち個別具体的な使用価値の質的転

換を形態的に表現した貨幣の商品流通形態 ($W-G-W'$) は、現実的価値の量的転換を表現する貨幣の流通形態 ($G-W-G'$) へと移行しなければならないために、貨幣は一時的に遊休化し、蓄蔵されなければならないということである。

使用価値の質的転換 ($W-W'$) から価値の量的転換 ($G-G'$) への形態的転換が、貨幣の量的制限性と質的無限性との矛盾の解決として貨幣自身に求め、貨幣は流通手段としての機能から蓄蔵手段としての機能に転化し、さらにこの蓄蔵された貨幣は再び流通界に出て、量的拡大運動を展開する。その目的は価値の量的制限性という拘束からの解放である。

$W-G$

↓ 貨幣の流通界からの脱落

$G-W-G'$: 貨幣の流通界における自己増殖運動

蓄蔵手段としての貨幣は、再び流通界に出現するのであるが、そのとき貨幣は単なる商品の流通形態に復帰するのではなく、増殖運動を展開する。貨幣は資本となる。すなわち貨幣は現実的価値の自立的運動を展開することによって価値の量的変換を図り、その量的制限性を解決するために自己増殖する価値の運動体として資本となる。 $G-W-G'$ は、貨幣の資本としての流通形態である。したがって貨幣は資本準備金として蓄蔵される⁴⁵⁾。

ところで貨幣が耐久性もなく、不変性もなく、希少性もなく、また大きさや重さ、形において適正さを欠き、権威や信頼性もない雑多なモノや「薄汚れた紙切れ」であるならば、その貨幣は蓄蔵手段としての機能はもちえないであろう。蓄蔵手段としての貨幣は貨幣としての本性を備えていなければならないのである。したがって流通手段としての貨幣が蓄蔵手段としての機能に障害もなく移行されなければならないものであるとすれば、流通手段としての貨幣においても価値が保証された信頼の裏づけのある本性がそなわっていなければならないのである。偽札やまたたとえ国家が発行したモノであるとしても法的権威も信頼性も希少性もない「薄汚れた紙切れ」は、詐欺的には流通しても、一般的永続的に流通するものではないのである。そのような貨幣は「貨幣の性格を剥奪されたりする。」

岩井は、貨幣が蓄蔵される理由として、「不幸にも、この世は不確実性にみちている。おもいがけない事態の発生によって、いつなんどき特定の商品が入り用になるかもしれないし、おもいがけない市況の低迷によって、いつなんどき特定の商品が買い得になるかもしれない。また、たとえあらかじめ予定された時点であらかじめ決めておいた商品を買うための資金として債券や株式を保有していても、将来のその時点において債券や株式の価格がおもいがけない値下がりをするかもしれない。まさにこのような不確実性の存在が、ひとびとに流動性なるものを欲望させるようになるのである。」⁴⁶⁾と述べているが、その「不確実性の存在」とは何か。前半の商品売買については商品流通における必然的に生じる不断の変動から遊休貨幣が発生し、それが蓄蔵（保有）されるということであり、後半の「債券や株式」については貨幣の資本としての運動である。しかもその資本は貸付資本（利子生み資本）としての運動である、。

岩井は、貨幣が種々の準備金として蓄蔵（保有）される原因を、貨幣と商品との内在的要因から発生する遊休貨幣とその蓄蔵貨幣への必然的転化を説明することなく、現実の社会で生じている常識的事実から説明しているにすぎないのである。だから岩井の蓄蔵手段としての貨幣の認識は次のようなものに留まるほかないのである。すなわち「貨幣がまさに一般的な交換の

媒介でしかないということが(そして一般的な交換である限りにおいて)、貨幣にその実体性とはまったく独立な流動性という名の有用性のごときものをあたえてしまうことになるのである。ほんらいは商品を手に入れるためのたんなる媒介でしかないはずの貨幣が、その商品とならんで、それ自体あたかもひとつの商品であるかのように、流動性選好という名の欲望の直接的な対象となってしまうのである。」⁴⁵⁾と。

貨幣が交換手段としての機能から蓄蔵(保有)手段としての機能への転化は、それが交換手段としての機能しか持ち合わせていないからである、というまさにあの「循環論法」がここでも繰り返されるのである。そして貨幣に対する「流動性選好」とは、「その実体性とはまったく独立」したものであるという。しからば、1960年代に数回起こったあのゴールド・ラッシュは何であったのか⁴⁷⁾。またなぜアメリカ大統領ニクソンが「金・ドル交換停止」を宣言し、金地金を手放そうとしなかったのか。それは「薄汚れた紙切れ」であるドルの失墜からであろう。国家が信頼されなくなると、その紙幣も流通の危機に陥り、その支配者は強権を発動して「真実の貨幣」を独占的に抱き込んで保有する。そのうえその国家は紙幣という「薄汚れた紙切れ」を過剰発行しつつ、インフレーションという国家的搾取を行う。

貨幣の「実体性」とは、二重の意味があるのである。その一つは「商品語」の世界である貨幣価値の現実性であり、自立性である。それは貴金属の金ないし銀である。他の一つは「人間語」の世界における“信用性”である。それは国家の「法の支配」に基づく権威ないし権力への人々の“信用性”である。国家の不始末によって国家へのその“権威的信用”が揺らぐならば、貨幣の「実体性」は「商品語」の世界に回帰する。国家への“権威的信用”が確実で不動のとき、貨幣の「実体性」は「人間語」の世界で生命を保つ。すなわち“権威的信用”のない世界において「薄汚れた紙切れ」は貨幣として生命をもたず、決して流通することはない。換言して極論すれば、すでに崩壊した国家の発行した紙幣が流通し続けた歴史的ためしはないということである。もっともそれは骨董品としての商品“価値”はあるであろうが⁴⁸⁾。

われわれはここで「信用」の世界にさらに突き進んでいかなければならない。

7. 支払い手段と「信用」の二重性

商品流通 $W-G-W'$ において、商品の売買が貨幣を媒介せずに単に $W-----W'$ という形態をとることもできる。例えば、 W_1 (500万円) の商品所有者甲がその商品を求めている乙に販売するとき、貨幣を受け取るかわりに乙からその代金分の債務証書、すなわちある期日に券面金額の支払を約束した約束手形(商業手形)を受け取る。乙または丙という人物に自己の商品 W_2 (600万円) を販売するに貨幣を受け取る代わりにその代金分の約束手形を受け取る。丙は自己の商品 W_3 (700万円) を甲に販売するに貨幣を受け取る代わりにその代金分の約束手形を受け取る。甲と乙と丙はある満期日にそれぞれの約束手形を相殺し、決済することができる。この信用取引において貨幣は売買代金の相殺された残金を支払うだけで済む。もしそれぞれの商品の価格が同じならば、相殺残高はゼロであり、貨幣はまったく必要とされず、商品だけが流通したことになる。

この例のような信用取引において、商品の総額は1,800万円が流通したのであるが、約束手形は乙の振出金額が500万円、丙の振出金額が600万円、甲の振出金額が700万円であるとすると、

甲は200万円の債務、乙は100万円の債権、丙も100万円の債権をもつこととなり、したがって甲は100万円ずつ乙と丙に支払いさえすればよい。1,600万円の貨幣が節約されたことになる。

この三者間における商品取引には、種々の意味が含まれている。その一つは、商品が貨幣の媒介なしに「信用」だけで流通し、最終的に少額の金額による支払で決済されるということである。ただ貨幣の代わりに商品流通の媒介手段となったのは債務証書である約束手形（商業手形）である。それを受け取る商品販売者は、商品を買手の支払約束を「信用」して販売したということである。この信用取引は商業信用とよばれるものである。この信用取引である商業信用において売り手は買い手に対して「信用」を与え（与信）、債権者となり、買い手は売り手から「信用」を受け（受信）、債務者となり、両者の間に債権・債務関係が同時に発生する関係が成立する。

このように商業信用においては流通貨幣が節約されるばかりでなく、また同時に蓄蔵貨幣も節約され、それだけ商品の流通量が増大し、流通速度が促進されることとなる。それは最小限度の貨幣量で商品売買が可能となったからである。ここでは貨幣は支払手段として機能すればよいだけである。

その二は、商業信用は同時に債権・債務関係という金銭の貸借関係を同時に発生させるという「貸借の信用」、すなわち「貸付信用」が成立するということである。このことは例のように甲、乙、丙の三者において「貸付信用」という借り手の「債務約束」を信用するという人間関係における人格的な「信用関係」が成立していなければ、「貸付信用」は成立せず、したがって商業信用も成立しない、ということを意味している。

この「信用関係」が成立する利害関係的根拠は、商品流通そのものにある。商品流通の原則は等価交換にある。それは、不断の不均等の均等化という平均法則としての「価値法則」の貫徹に求めることができる。商品交換は、詐欺的でも、略奪的でもなく、「本物」の商品と貨幣との交換関係を前提し、したがって商品取引者同士が平等で合理的な関係として存在していることを前提としている。この前提に立って商品取引者が、商品流通量の増大と流通速度の促進という目的合理的性を追求するならば、相互に「信用」を与え合うことが「利」と「理」に合うこととなる。すなわち流通貨幣と蓄蔵貨幣の節約によって最小必要限度の支払手段を持ち合わせることで、最大限の商品流通量ないしは最大限の流通速度を実現して富の蓄積を図るという商品取引者相互の「合理的利害」の一致に基づいて「信用関係」が成立するのである。

商品流通界の拡大に伴う「貸付信用」と「商業信用」の拡大は、流通貨幣と蓄蔵貨幣の節約と反比例して「手形」という債務証書の流通が増大し、一般化する。その「手形」は「信用貨幣」の形態をとり、転々と流通する。すなわち手形を保有する債権者が裏書きすることによってそれが支払手段として機能し、それが支払期日まで流通しつづけられるからである。マルクスは「信用貨幣」発生の根拠と貨幣の支払手段としての機能の増大について次のように述べている。「信用貨幣は、直接的には支払手段としての貨幣の機能から生ずる。というわけは、売られた商品に対する債務証券自身が、再び債務請求権の譲渡のために流通するのである。他方において、信用制度が拡大されるにしたがって、貨幣の支払手段としての機能も増大する。貨幣は独自の存在形態を得る。この形態をとって、貨幣は大きな商業取引の部面を住まいとする。」⁴⁹⁾と。かくして蓄蔵貨幣は支払手段として出動するために必要な最小限度内に節約される。

マルクスは、「支払が同一場所に集積するようになるとともに、それらの決済の独自の施設と方法とが自然発生的に発達する」⁵⁰⁾ものとして「為替取引」や「手形交換」の場所と合理的方法

が生み出される、といっているが、そうした金融業者の頂点として銀行が成立する。

銀行は、流通界の貸付信用と商業信用とを社会的に統一した「銀行信用」の機関である。すなわち銀行信用は、個別的な業者の保有する遊休貨幣、すなわち商品流通から必然的に発生する社会的遊休貨幣を「預金」として集中・集積し、それを再び流通界に投ずるという貸付信用の役割を演ずるとともに、商業信用における債権・債務関係を代位する。この代位は「手形割引」の形で、割引依頼人の手形を一定の率で割引き、銀行宛債務を表示する銀行券を交付し、その銀行券を一般社会的に流通させる。ここで銀行は手形を割り引くことでその手形の保有者として債権者となると同時に銀行券の交付によって貨幣支払いの義務を負う債務者となる。交付された銀行券は商業手形を代位した「一覽払債務証書」であり、一般社会的に流通する最も信用度の高い「信用貨幣」である。

なお銀行は社会的な債権・債務関係を自己の債務として存在している「預金」を決済する手段として用いることができる。すなわち「預金」が支払手段として機能し、たんなる帳簿の数字が移動することで、社会的決済が行われる。したがってたんなる数字でしかない「預金」も「信用貨幣」の形態をとる。

銀行券および預金という「信用貨幣」には二重の意味での「信用」がある。第一の意味における信用は、その「信用貨幣」が信用取引を背景として発達して商業手形の発達した形態であり、したがってそれは本来の貨幣といつでも交換できるという「兌換性」の「信用」である。この場合、その銀行券は兌換銀行券と呼ばれる。この兌換性への信用が本来の信用である。

しかしこの兌換銀行券が過剰に発行され、インフレーションを引き起こすようなことがあれば、本来の貨幣はその銀行券と兌換され、銀行の金庫のなかの本来の貨幣は払底してしまい、銀行は兌換停止に追い込まれるであろう。また、商業恐慌が発生し、販売不振による手形流通に阻害が生じると、支払不能の連鎖反応が生じ、預金の引き出しと貸し出し増加の要請が急増する。この両者の不均衡の拡大もまた本来の貨幣の流出を激化させるものとなり、兌換停止、銀行取引停止も余儀なくされる。兌換銀行券は不換銀行券に転化する。

現在発行され流通している不換銀行券においてはどのような性格の「信用」が存在しているのだろうか。不換銀行券は本来の貨幣とは交換されないため、本来の「信用貨幣」ではない。しかし銀行券の発行権を独占する中央銀行は、国家と同様の「法の支配」の下で権威と権力を有し、「貨幣価値の不変性」を保持するという「権威的信用」を保持している。すなわち不換銀行券への「信用」は、国家の発行する不換紙幣への「権威的信用」と同様に、その発行機関の「法的権威」を実体とするもので、人々の「法」への信頼を基礎とするものである。換言すれば不換銀行券はそれ自体に「兌換」という「本来の信用」が付与されていないが、その発行機関のもつ法的権威や権力に対するいわば「権威的信用」を実体とする「信用」が付与されているに過ぎないということである。だからこの「信用」は「擬制的信用」というべきものである。これが第二の意味の「信用」である。すなわちこの「擬制的信用」とは「本来的信用」をもたない不換銀行券に兌換銀行券と同様に「貨幣価値の不変性」という「本来的信用」があるかのように「信用擬制」した信用のことである⁵¹⁾。

通貨発行機関が貨幣の流通法則と乖離した通貨発行政策をとり、そのことで発行機関の権威や権力に対する「権威的信用」が失墜するならば、換言すれば、不換銀行券に「貨幣価値の不変性」という人々の信頼が打ち碎かれるならば、その「擬制的信用」貨幣、すなわち「不換紙幣」は貨幣としての機能を剥奪され、たんなる「薄汚れた紙切れ」として捨て去られるであろう。

う。そしてかわって新たな信頼される権威と権力を保持した発行機関が登場し、再び「権威的信用」を保持した「擬制的信用」貨幣が発行され、流通することとなるであろう。このことは幾多の歴史的事例が証明している⁵²⁾。

かくして「信用」には、「本来的信用」と「擬制的信用」という二重性があり、「薄汚れた紙切れ」が二重の意味での信用を付与されると、それは「信用貨幣」として転々流通するのである。それは「流通するから流通するのである。」という「無限の循環論法」で流通しているのではないのである。今日の不換紙幣は「擬制的信用貨幣」であり、第二の意味での「信用」を保持した「信用貨幣」として一般的に流通しているのである。

本来の貨幣である金・銀地金も「本来的信用貨幣」（兌換紙幣）も今日一般的に流通していない。その原因は、「信用貨幣」の過剰発行に起因するハイパー・インフレーションや金融恐慌による「貨幣飢饉」によって、国家または中央銀行が兌換を強権的に停止し、「本来の貨幣」を最も優れた「流動性選好」として流通界から引き上げ独占的排他的に保有しているからである。それはまさに国家による経済外的強権発動による「信用」の破壊であり、「信用貨幣」の廃棄である。「本来的信用貨幣」（兌換紙幣）が、国家権力の詐欺的、略奪的策略によって破棄され、「擬制的信用貨幣」（不換紙幣）に移行させられたのである。しかしこの「擬制的信用貨幣」も人々の国家の法的権威と権力への「権威的信用」が保持されつづける限りにおいて流通するのであって、その最後の砦である人々の「信頼」が打ち砕かれてしまうならば、そのとき「薄汚れた紙切れ」の「擬制的信用貨幣」（不換紙幣）は紙くず同然に捨て去られるであろう。

今日では、各国政府間ないし各国銀行間において国際協調体制が敷かれ、変動相場制度の下で安定した国際通貨体制の運用に努力が払われていることは周知の事実である。こうした各国の通貨政策が「信頼」を維持しつづけ、「貨幣価値の不変性」に対する「信頼」が維持されつづけるならば、「擬制的信用貨幣」は「本来的信用貨幣」や「本来の貨幣」と同様の機能をもって正常に流通するであろう。「信用」がたとえ「擬制的信用」であろうとも、「信用」がある限り「薄汚れた紙切れ」も「エレクトロニック・マネー」も「本来の貨幣」と同様に機能するのである。不換紙幣の存在は「法の支配」機関である国家と表裏一体をなしているものであり、したがって不換紙幣の「生命」は、国家に対する「権威的信用」にその「秘密」を解くカギがあるであって⁵³⁾、「無限の未来に住む人間への主観的期待」にあるのではない⁵⁴⁾。

注、及び引用文献

- 1) 岩井は、彼の『貨幣論』（筑摩書房、1993年）において価値形態論を貨幣生成論と貨幣機能論とを混同しているのみならず、「循環論法」で貨幣の「存在」を論証したつもりであるが、その非科学性と論理の誤りについて、鈴木敏紀「価値形態論で解明されるべきこと—岩井克人『貨幣論』批判—」（上越教育大学研究紀要第14巻第2号、1994年所収）が明らかにしている。
- 2) 岩井、同上書、p. 67, p. 98, p. 99.
- 3) 岩井、同上書、p. 67, p. 105.
- 4) 岩井、同上書、p. 97.
- 5) 岩井、同上書、p. 98.

- 6) 岩井, 同上書, p. 105.
- 7) 岩井, 同上書, p. 99.
- 8) 岩井, 同上書, pp. 131~132.
- 9) 岩井, 同上書, p. 132.

なお湯浅赳男は、その著『文明の「血液」—貨幣から見た世界史—』（新評論、1988年）において、アインツィヒの著“PRIMITIVE MONEY in Ethnological, Historical and Edconomic Aspect”（BY PAUL EINZIG. SECOND EDITION. 1966.）にある「原始貨幣」の事例について、ポランニーに依って次のように解釈している。「つまり、貨幣はその原始において経済の領域の問題ではなく、いや、むしろ経済とかかわりないシステムとして始まったとしたほうが正確であろう。それはまさにもろもろの人間の価値にかかわるものであるから、これら人間の価値と貨幣素材との関係はいわゆる記号内容と記号形態のそのように恣意的であるとしか言いようもあるまい。」と述べた後で、いわゆる近代に通じる貨幣としての金及び銀が特権的地位を獲得する「貴金属の制覇への道は、こうした『原始貨幣』のシステムが排除されることによって掃き清められたものである。」（pp. 39~40）と言っている。これらの雑多な「原始貨幣」が掃き清められ、そのシステムが排除されるプロセスは、「中央集権的官僚制国家」による「交易」の「独占」であったという。（pp.41~42.）

- 10) KARL MARX, “DAS KAPITAL” I. DIEZ VERLAG BERLIN, 1962. S. 104. 向坂逸郎訳『資本論』岩波文庫(-), p.171.
- 11) Marx, *ibid.*, S. 117. 向坂(-), pp. 196~197.
- 12) 岩井, 前掲書, p. 147.
- 13) Marx, *ibid.*, S. 120. 向坂(-), p. 202.
- 14) Marx, *ibid.*, S. 121. 向坂(-), p. 202.
- 15) 岩井, 同上書, p. 147.
- 16) 岩井, 同上書, p. 187.
- 17) 岩井, 同上書, p. 189.
- 18) 岩井, 同上書, p. 188.
- 19) 岩井, 同上書, p. 189.
- 20) 岩井, 同上書, p. 198.
- 21) 岩井, 同上書, p. 188.
- 22) 岩井, 同上書, p. 190.
- 23) 岩井, 同上書, p. 191.
- 24) 岩井, 同上書, p. 193.
- 25) 岩井, 同上書, p. 193.
- 26) 岩井, 同上書, p. 195.
- 27) 岩井, 同上書, p. 188.
- 28) 岩井, 同上書, p. 189.
- 29) 岩井, 同上書, p. 193.
- 30) Marx, *ibid.*, S. 117. 向坂(-), p. 195.
- 31) Marx, *ibid.*, S. 117. 向坂(-), p. 195.
- 32) Marx, *ibid.*, S. 117. 向坂(-), p. 196.
- 33) 岩井, 前掲書, p. 150.

- 34) Marx, *ibid.*, S. 118. 向坂(-), p. 197.
- 35) Marx, *ibid.*, S. 139. 向坂(-), p. 235.
- 36) Marx, *ibid.*, S. 143. 向坂(-), p. 242.
- 37) 岩井, 前掲書, p. 128.
- 38) 岩井, 同上書, p. 146.
- 39) 岩井, 同上書, pp. 188~189.
- 40) 岩井, 同上書, pp. 185~186.
- 41) 岩井, 同上書, p. 186.
- 42) 岩井, 同上書, p. 186.
- 43) 岩井, 同上書, p. 187.
- 44) Marx, *ibid.*, S. 148. 向坂(-), p. 251.
- 45) 貨幣が商品としての流通形態から資本としての流通形態へと転化する際に、貨幣は資本準備金として目的的に蓄蔵されなければならない。そしてその資本の運動形態は、商業資本形態→問屋制前貸し資本形態→産業資本形態→貸付資本形態へと発展する。商品および資本の流通形態から必然的に発生する遊休貨幣は社会的遊休貨幣として集中集積され、再び分散して各資本に転化されるという貸借的関係をもつこととなる。この関係は債権債務の関係を生じさせる貸借的信用関係の社会的成立を前提とした関係である。したがって貨幣の支払手段としての機能はこの貸借的信用関係を前提として初めて機能するものであり、そしてまた商業信用もこの貸借的信用関係を前提とした初めて成立するものである。このことについては、鈴木敏紀『経済発展と地域開発の理論』（耕文堂書店、1992年）第3章「資本の諸形態と剰余価値」を参照せよ。
- 46) 岩井, 前掲書, pp. 160~161.
- 47) とくにフランスの「ドル過剰」に対する不信、「ドル為替本位制」に内在する不信は厳しく、当時のド・ゴール大統領は「金本位制復帰」を主張した。そして当時のデイスカール・デスタン蔵相は次のような国際通貨制度の改革案を提案した。
 - ①中央銀行の決済は金によらねばならない。
 - ②中央銀行の対外準備は金および金に基礎をおいた準備資産によらねばならない。
 - ③經常取引に必要なものを除き、中央銀行は余剰外貨準備を解消すべきである。その後に自国通貨の金との交換を認める。長守善『マルク、フラン、ポンド』（中公新書、1965年）p. 95.
- 48) 東ドイツが1989年11月に崩壊し、ドイツは統一され、通貨も西ドイツ・マルクに統一され、東ドイツ・マルクは貨幣としての価値を喪失し、貨幣の機能を剥奪されたのであるが、ますます「価値」を増し、「貨幣業者や愛好家の間では、とくに新札の場合、かつての何倍ものプレミアムを付けて取引されている。」という。富田昌宏『紙幣が語る戦後世界』（中公新書、1994年）pp. 88~89.
- 49) Marx, *ibid.*, SS.153~154. 向坂(-), p. 260~261.
- 50) Marx, *ibid.*, S. 151. 向坂(-), p. 257.
- 51) 「信用の二重性」は、別の意味でも存在しうる。現在のようなドル為替本位制の下で、金の裏づけのないドルが国際取引の決済手段となっているため、出超国はドルを自国通貨と交換し、中央銀行はその分通貨の発行を増加させる。そしてまたそのドルが資本輸出という形で米国へ還流すると、米国ではその分国内において貸し出し増加という形で信用の拡大を図ることができる。長守善, 前掲書, p. 92. 参照。

ドルという不換紙幣が国際通貨の基軸通貨たる地位にあるのは、国際政治経済におけるアメリカ合衆国の権威と権力に対する盲従か服従、あるいは「幻想的信頼」のいずれかに起因している。これは国際的インフレーションの可能性を秘めた危険な信頼関係である。したがって、この「信用の二重性」も元をただせば、「本来的信用」と「擬制的信用」の二重構造の延長線上にあるものといえる。

- 52) 富田昌宏は、廃棄され、新たに発行された紙幣の最近の事例を豊富に上げられている。通貨改廃の原因は「体制転換」、「政権交代」、「ハイパー・インフレーション」、「対外関係の変化」、「施政権の変化」、「戦争・動乱・紛争」などであり、「お金は常に戦争の犠牲者である。いつの世でも、戦争の後、反故になっていた札束の山が残り、焼却、廃棄されるのが常である。」（前掲書、P. 117）と、氏は言っている。

すなわち国家または政府の転覆または消滅は必ずその国家または政府の支配する紙幣を消滅させるが、紙幣の改廃は必ずしもそれを支配する国家または政府の転覆または消滅を前提とはしない、ということがわかる。

- 53) 高木幸二郎もその著『貨幣—その理論と歴史』（有信堂、昭和43年）で、「国家に対する人民的信頼」（p. 74）、すなわち「商品所有者の一般的意志」はそれを表現した「法律」の支配のもとにあり（p. 83）、その「動揺」（p. 74）がない限り、紙幣は「簡易迅速」に流通すると述べている（p. 74）。しかしまた、国家が紙幣インフレーションを引き起こし、「自らの権力によって強力的に貨幣流通の法則を破棄」しようとしてもその支配に屈せざるをえないとも述べている。（p. 87）
- 54) 岩井、前掲書、p. 188.

The Functions of Money and Credit

—Criticism on Katsuhito IWAI's "The Theory of Money"—

Toshiki SUZUKI

ABSTRACT

Karl Marx analyzed the functions of money in his "Das Kapital" in great detail. They are measure of money, means of circulation, means of hoard, means of payment, and world money. Marxist economics is based on this theory of money. But we have some interpretations of this theory of money. For example, is world money included or not in the category of functions of money? What is the logic of the development that means of hoard switch over to means of payment? What is the logic which solves the contradictions that price estranges itself from value? What on earth is money?

We have the outcome of many years of the study. But Katsuhito Iwai criticises the Marxist theory of money with his preposterous logic that we cannot pass over. Iwai cuts the necessity of money in the forms of value and the functions of money in hanging in two with a single stroke of the sword with the logic of "infinite circular argument hanging in midair"; however, his logic is not logically and positive definitely.

The purpose of this paper is to demonstrate with the device of added conceptions that Marxist theory of money is correct basically. The added conceptions are means of realization of value, means of realization of value of use, means of fiction of value, and duality of credit. The last conception i. e. duality of credit means dual structure of credit in which "primary credit" and "fictitious credit" exist.

Primary credit means the credit which is based on the relations of credit. The money which circulates in the place of the relations of credit is "credit money" which have developed from commercial papers.

Fictitious credit means "authoritative credit" which is based on the credit of "a legal authority" which originates from "the control of the law" by the state. The money which circulates in the place of the relations with "authoritative credit" is "inconvertible notes" which are represented by inconvertible notes of bank and notes of government.

The key to the solution of the "secrecy" that the inconvertible notes which are "filthy papers" emphasized by Iwai circulate perpetually does not exist in the space of "infinite circular argument hanging in midair", but in the real place of "duality of credit".

* Division of Social Studies, Department of Social Sciences